

2005 年日本国際博覧会（愛知万博）と植物検疫

“自然の叡智”をテーマにした日本国際博覧会が、3月25日から9月25日までの185日間、名古屋東部丘陵において開催されている。

この博覧会には、120以上の国と国際機関が参加しており、世界各地で進められている自然環境等に配慮した多様な取り組みや最先端の技術を活用した知恵が紹介されている。

各国館内では、その国をイメージさせるような植物類の展示も行われており、これら植物類の輸入に伴う病虫害の侵入・まん延を防止するため、植物防疫所では輸入港での検査はもとより、博覧会会場内においても的確な植物検疫の実施に努めており、会場内に設置された国際郵便局での郵便物検査、輸入禁止植

物の取締り等を行っている。

また、ミバエ類等の重要病虫害を早期に発見するため、開催期間中、会場内に侵入警戒調査用トラップを設置し、調査を実施している。

今回の博覧会では、ロシア連邦の永久凍土から発掘されたマンモスの頭部及び左前肢が展示されている。当該展示物には植物防疫法上輸入が禁止されている土壌が付着していることから、農林水産大臣が分散防止等、適切な管理を行うことを条件に輸入、展示されている。

植物防疫所としては、博覧会協会等関係機関と密に連携し、的確かつ円滑な植物検疫の実施に努め、博覧会の成功に寄与したいと考えている。



写真提供：2005年財団法人日本国際博覧会協会

海外のニュース 分布を拡大するダイズシストセンチュウ

ダイズシストセンチュウ (*Heterodera glycines* Ichinohe) は、ダイズ、アズキ等豆類の重要害虫として知られており、近年、数ヶ国で新たな発生が報告され広がりを見せている。

本種は我が国の他、中国、朝鮮半島で古くから発生しており、当初はテンサイシストセンチュウとして扱われていたが、1952年、新種として記載された。低温耐性が強く高温には比較的弱いとされているが、1980年代以降コロンビアやエクアドル等の標高の高い地域で発生が確認されている。

2000年にはイタリア Lombardia 州のダイズほ場で新たに発生が確認された。この発生は欧州連合として初めてであり、ヨーロッパ・地中海地域植物防疫機関 (EPPO) は、重要有害線虫に指定して侵入を警戒している。また2002年には、インド中部のダイズほ場で本種のシストが高い密度で新たに発見されている。

一方、アメリカでは1954年、ノースカロライナ州で初めて発生が確認され、徐々に分布を拡大し、現在、27州に広がっている。同国では、本種による被害額が年間約2億ドルと試算され、本種をダイズ栽培の最重要線虫とし、輪作体系の確立や抵抗性品種の開発等の研究を進めるとともに州間検疫を実施し本種のまん延防止を行っている。

なお、本種の防除方法は、殺線虫剤の利用や輪作による密度の抑制等があげられるが、シスト内の卵は土壌中で10年以上の生存が可能であるため、根絶は困難となっている。

参考：Boll. Zool. agr. Bachic. Ser. II, 32 (3):261-267

発行所 横浜植物防疫所
〒231-0003 横浜市中区北仲通5-57 横浜第二合同庁舎 ☎(045)211-7155
発行人 奥 富 一 夫
編集責任者 佐々木 武
印刷所 内村印刷株式会社